



53歳からの大学院挑戦で、 定年後に大学教授の夢を実現

私には40歳代半ばから、実務経験を活かし、研究と教育に携わる大学教授になりたいという夢がありました。あるとき、大学教授になるには博士号があった方がよいという話を聞き、大学卒業30年目、53歳となった2007年の春に、奮起して青山学院大学大学院国際マネジメント研究科の3年制MBAコース(当時存在した制度)に入學しました。かくして、8年にわたる会社と大学院の「二足の草鞋生活」が始まりました。そして、2015年3月に学位を取得し、翌月には大学教授の夢を実現することができました。60歳を境に、私の新たな人生が始まりました。

なぜ、53歳で大学院進学を 決意したのか

(1) 進学理由

私は40歳代半ばから、日本と米国の金融機関での勤務で得た証券業務の経験と知識

を活かし、研究と教育に携わる大学教授になりたいという夢を持っていました。特に無限の可能性を秘める若い大学生に教えたという強い思いもありました。大学教授が知的かつ創造的な職業と考えたことも、大学教授願望を強めた原因の一つだと思います。今にしてみれば、我ながら単純な人間だとあきれられる反面、ためらわずに突き進んだことが良かったと思います。

私は1977年に大学を卒業し、住友銀行(現三井住友銀行)に入行しました。その後15年間はニューヨーク支店、証券部(東京、ロンドン)証券子会社などに勤務し、貴重な経験ができました。第2の職場であるモルガン銀行東京支店(J・P・モルガン)では、7年間にわたり債券と金融派生商品の売買やセールスを担当し、同社の高度な金融工学技術に触れることができました。さらに、45歳のときに第3の職場、東京放送(現TBSテレビ)に入社し、経営企画



法政大学大学院
政策創造研究科 教授
小方 信幸

【おがた・のぶゆき】1977年に慶應義塾大学経済学部卒業後、住友銀行(現三井住友銀行)、モルガン銀行東京支店、東京放送(現TBSテレビ)を経て、2015年4月に帝京平成大学教授。2019年4月より現職。金融SDGs研究会代表/理事、日本経営倫理学会副会長。

経理・財務、IR(投資家向けの広報戦略)などの仕事を担当しました。

いずれの会社でも仕事漬けの生活ながら、営業でも経理でも生きがいをもって会社員生活を送っていました。ところが、仕事大好き人間であった私も、50歳になると10年後の定年退職が気になり、一瞬、気が失せた記憶があります。これは、私だけではなく、定年を意識した会社員の多くが経験する感覚ではないでしょうか。当時も現在も、50歳代会社員をターゲットに、定年後の充実した生活を取り上げる雑誌や書籍は多いと思います。このような雑誌や書籍が売れるのは、定年延長や定年後の再雇用が増えている現在であっても、50歳代の会社員に心の隙間があるからだと思います。

しかし、私の場合は、幸いにも、定年後は大学教授になろうという40歳代の妄想が再び湧きだしました。そのようなとき、大学教員の知人から大学教授になるには博士号



>>> 私のキャリアデザイン

があった方がよいという話を聞き、大学院進学を決意しました。

また、私には大学時代から定年退職後は母校の文学部に学士入学して、西洋史か哲学を学びたいという夢もありました。企業人から見れば、社会人になる自覚と心構えに欠ける駄目学生です。しかし、そのような学びへの願望も、大学院進学に働いたと思います。

大学院進学を決めると、次は専攻を決めるために、自分ができることを考えました。いろいろ考えたものの、結局、金融証券業務の経験、そして50歳直前に取得した日本証券アナリスト協会検定会員（現認定アナリスト）くらいしか思いつきませんでした。そこで、大学院ではファイナンスを学ぶことを決め、ファイナンス分野では優れた先生が多い、青山学院大学大学院国際マネジメント研究科（青山ビジネススクール、ABS）を迷わず選びました。

綺麗なキャンパス、蔵書の多い図書館、通学しやすい立地なども魅力的でした。同じ学ぶなら良い環境で学びたいという気持ちもありました。さらに、青山ビジネススクールの場合、ビジネススクールでありながら、博士後期課程（DBAコース）が設置されていたことも選択の理由です。

（2）周囲の反応

大学院進学は個人的なことであり、会社の人事部から申告不要と言われましたの

で、博士学位取得直前まで社内では大学院のことは公言しませんでした。

一方、大学時代のゼミやクラブの友人達とは親交を続けており、彼らには大学院進学を伝えました。友人達の多くから温かい言葉をもらい、非常に励みになりました。そんな中、ある友人から「本気で大学教授になろうと思ってるの？」と少々棘のあるメールをもらいました。確かに、学位取得まで何年掛かるか分からないうえに、大学院に進学しただけで大学教授になれる保証はありません。客観的に見れば、その友人の言うことは正しく、むしろ善意からの忠告だったと言えます。

しかし、私は誰が何と言おうと、「いま大学院に行かなければ後悔する。いましかない、最後の挑戦だ！」という思いがありました。また、私の場合は妻が最大の理解者でいてくれたことが、何よりも有難いことでした。博士学位と大学教授というドン・キホーテのような「見果てぬ夢」を見続けた、私を信じて応援してくれた妻には「感謝」の言葉しかありません。

会社と大学院の 二足の草鞋生活

（1）若い同期生との学びの機会

2007年4月、大学院に入学すると、同期130人の多くは予想通り30〜40歳代でした。同期生の多くは様々な業種の企業で働いており、営業、総務、人事、経営企

画などの職種の人が多かったと記憶しています。彼ら彼女らは、実務に役立つ実践的な知識と思考力を身に付け、キャリアアップするために入学していました。しかも、ほとんどの同期生は自費で学びにきているため、受講態度は真剣そのもので、授業は常に熱気を帯びていました。

私は53歳という年齢から、当初は周囲の雰囲気にも馴染めるか多少は不安がありました。しかし、それは杞憂でした。授業でのグループワーク、クラス討論、学校行事に加え同期との飲み会を通じて、年齢や職業に関係なく仲間意識が生まれました。仲良くなった同期生もおり、楽しいMBA時代でした。

大学院では、同じ学生として共に学ぶ姿勢と、他の学生に敬意を払う（リスペクトする）気持ちがあれば、社会人大学院では世代を超えた強い仲間意識が生まれます。それが社会人大学院の良いところの一つだと感じました。

（2）時間制約と体力の衰え

青山ビジネススクールに限らずいずれの社会人大学院でも、初年度は土曜日の授業以外に週に2日ないし3日は夜間の授業を受ける必要があるはずです。青山ビジネススクールの学生達はそれぞれ仕事で忙しい中、18時30分開始の授業に合わせて何とか登校していました。

実際に授業を受け始めると、自腹で通



日本経営倫理学会主催、中外製薬後援の大学ゼミ間の研究発表大会「CSR構想インターゼミナール」で見事、3位入賞を果たした帝京平成大学のゼミ生たち



帝京平成大学の学長表彰を受けたゼミ生たちと一緒に記念撮影

学しているからという理由よりも、授業内容に興味が湧いて、何とか遅れまいと行動するようになります。

私は大学院在学中、経理の仕事をしており出張が少なかつた点は幸運でした。ただ、出張の少ない経理業務と言っても、非常に忙しい時期はあります。年度末の本決算、四半期決算、月次決算のときには、大学院の授業が終わってから会社に戻り、深夜1

時、2時まで仕事をしたこともあります。金曜日の深夜まで働き、徹夜で書いた期末課題レポートを翌土曜日の授業に持参したこともあります。

このような体験談を書く、体力の衰えを感じる50歳代の方は、自分には無理と思われるかもしれませんが、私の場合は、仕事が忙しいときでも大学院に通うことが楽しかったです。また、会社員生活の経験から、タイムマネジメント能力とメリハリの付け方が多少なりとも身に付いていたので、非常に忙しい時期も乗り切ることができたのだと思います。この点はベテラン社員の強みではないでしょうか。

(3) 博士後期課程での学生生活

2010年3月にMBAを取得し、同年4月に55歳で博士後期課程に進学しました。ようやく博士学位を目指す研究生活が始まりました。

ところが、入学して間もなく、私は当初の研究テーマに疑問をもち、新たな研究テーマを決めるまでに1年を要しました。DBAコースでも最高齢の私としては時間的に痛いロスでした。それでも迷い、悩み、考え抜いたことで、ライフワークとなるテーマに辿り着くことができました。それは、社会的責任投資 (Socially Responsible Investment, SRI) あるいはESG投資と呼ばれるテーマです。

ESG投資とは、投資の意思決定の際に、企業の売上や利益などの財務要因だけでなく、環境(Environment, E)、社会(Social, S)、ガバナンス(Governance, G)のESG要因(非財務要因)を考慮する投資と言えます。

研究で壁に突き当たったとき、それを乗り越えるには自分自身が努力する以外に方法はありません。そのようなとき、恩師の北川哲雄先生(現名誉教授)をはじめ多くの先生方の厳しくも適切なご助言と、院生仲間からの励ましは、壁を打ち破る強力な援護射撃となりました。先生方と院生仲間にかけていただきながら、幾つかのハードルを乗り越え、2015年3月に無事、博士学位を取得することができました。そのときすでに、私は「還暦」と「定年退職」を迎えていました。

現在の仕事について

一般的には、60歳で学位を取得しても、大学教員になるのは難しいと言われています。そのような中、私は博士學位取得の翌月、2015年4月に帝京平成大学の教授になりました。前年の教員公募に応募した際、博士學位(見込み)と実務経験が評価されたようです。

帝京平成大学では、念願の若い学生と共に学ぶ機会を得ることができました。特に思い出深いのは、2018年度のゼミ生達が、日本経営倫理学会主催、中外製薬後援

>>> 私のキャリアデザイン

の大学ゼミ間の研究発表大会「CSR構想インターゼミナール」に参加したことです。東北大学、慶應義塾大学などが参加する大会で、お茶の水女子大学、南山大学に次いで3位に入賞したのです。3位入賞が発表されたとき、ゼミ生から「先生が一番興奮している」と言われるほど嬉しく思いました。

ゼミ生達はその功績が認められ今年3月の卒業式で学長表彰される予定が、新型コロナウイルス感染拡大防止のため卒業式は中止となりました。非常に気の毒で残念に思います。それでも、学部長のご厚意で、三密を避けながらキャンパス内の大会議室で表彰式が行われました。彼らにとっても一生の思い出になったはずです。

帝京平成大学では、自分が目指した教育をある程度実践できたと思います。その一方で、研究に関しては十分な成果を上げていないことを悔やんでいました。

そのようなとき、法政大学大学院のCSR論担当教員の公募を見つけました。64歳の秋でした。応募期限の前日まで迷った結果、自分の研究領域であるCSR(Corporate Social Responsibility、企業の社会的責任)やESG投資について、社会人学生と真剣な議論をしたい、充実した研究環境で論文を書きたいという思いに突き動かされ、2019年4月に現在勤務する法政大学大学院政策創造研究科の教授となりました。

定年退職後の私は、大学教授として学生

と共に学ぶ喜びを噛みしめております。振り返れば、「二足の草鞋生活」を続けながらの、学位取得までの道のりは平坦ではありませんでした。しかし、充実した日々を送ることができました。志があれば道が開けることも、身をもって体験することができました。

人生100年時代に思うこと

定年後の生き方は人それぞれだと思います。私の場合は、先に述べたとおり、勉強以外は思いつかなかったので研究者を目指したと言えます。

経済産業省の官僚であり、作家として、高次元での「二足の草鞋生活」を実践された故・堺屋太一氏は「定年後こそ本当の人生が始まる」と述べていました。同感です。定年後に自分が本当にやりたいことが見つければ、豊かな人生を送ることができると思っています。

今後やりたいこと

現在の私にとっては、社会人大学院生の指導と自らの研究が、やりたいことであり責任です。学生達と共にCSR、CSV(Creating Shared Value、共通価値の創造)、SRI・ESG投資、SDGs、ソーシャル・ビジネスなどについて研究を行っています。そして、このような研究に挑戦し

たい方に、法政大学大学院政策創造研究科にぜひ入学してほしいと思っています。

私のゼミでは、研究の志があり研究仲間をリスペクトする方であれば、年齢や性別を問わず大歓迎です。現在、当研究科では20歳代から70歳代の方が研究に励んでいます。入試説明もありますので、よろしければ当研究科のホームページをご覧ください(<http://chikizukuri.sr.jp/>)。

大学教授退任後は、微力ながらも研究を続け、学術的、社会的に貢献するつもりです。一方で、20歳代の頃に抱いた母校の文学部への学士入学の願望も執念深くもっています。結局、無芸・無趣味の私には研究しかないかもしれません。しかし、それが私の幸せだと思います。あとは妻とのんびり旅行を楽しむことができれば、最高に幸せです。



法政大学大学院政策創造研究科の授業風景。幅広い年齢層が学んでいる